

よろい
甲を着た古墳人だより



よろいこざね ろっかく
甲小札が鹿角製とわかりました！

金井東裏遺跡では2領の鉄製甲りょう てっせいが出土しています。1つは古墳人が着ていたもの(1号)、もう一つは近くに丸めてあったもの(2号)です。その2号甲の下から発見された小札は、薄く加工した骨製かと推察して、当初は「骨製小札」と名付けました。ところが、その後の観察で小札の材質は骨ではなく、ニホンジカの角であることが判明しました、以後は「鹿角製小札」と呼び替えています。

「小札」は長方形に近い薄板で、これをいくつも重ねてとじ合わせることで甲をつくる部品です。甲は身体を防護するため丈夫な鉄製のほか革製・木製が知られていますが、鹿角製というのは全くの新発見でした。金井東裏遺跡では、貴重で珍しい古墳時代の出土品が多く見られますが、そのなかでも日本ではじめての発見となったこの鹿角製小札ろっかくせいこざねは、極めつけの稀少品といえます。

鹿角製小札は、ぐるりと巻いた形で発見されました。その後、室内で1枚1枚を発掘し、詳細な調査をおこないました。



鉄製の2号甲の下から姿を現した鹿角製小札

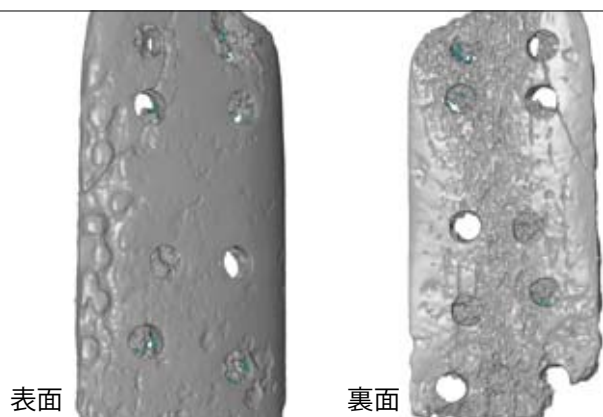
■ 小札の形

1枚の小札は、上部が半円形で下半は長方形、平均的な長さは6.5cm、厚さ5mm弱の板状をしています。上下と左右の小札どうしを結ぶためのひもを通す小さな穴が11箇所あけられています。



■ 鹿角製の証拠

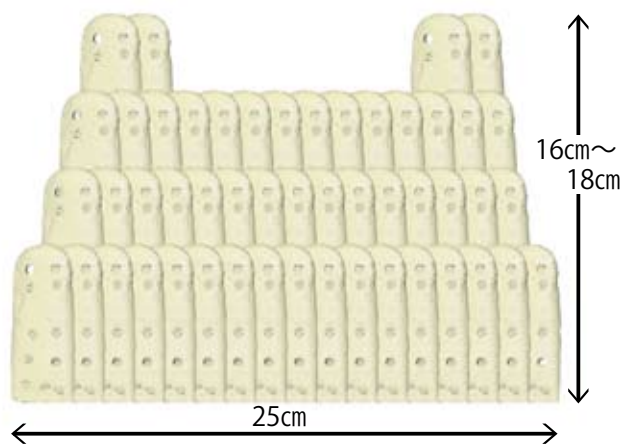
小札の大きさから、ニホンジカの角の一番太くまっすぐな部分を使ったと考えられます。小札の表面には、鹿角特有の細かい溝状の凹凸が、裏面には角の中心部にあるスカスカした「海綿」状の部分が残っています。



三次元計測画像から

■ 鹿角製小札の推定復原

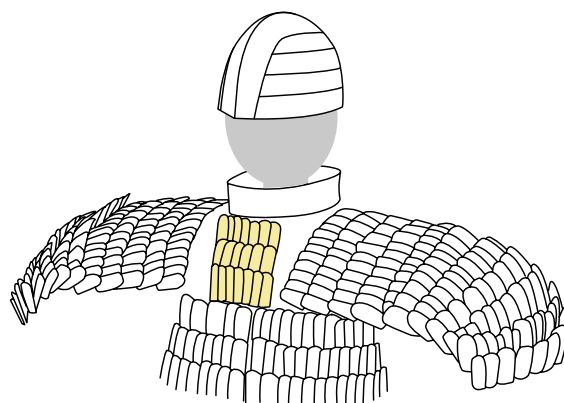
発見当初は、3段構成と考えていましたが、室内の調査であらたに小札が5枚見つかりました。最終的に、一番上の段が左右に分かれて4枚、次の段から14枚、15枚、17枚の合計4段構成となり、全体形は「エプロン」形で、広げると幅25cm前後、高さ16～18cmほどの大きさになると推定されます。



■ 鹿角製小札の意味

現状では、この形から胸の上部にあった「胸当て」か、弓を引くときの脇を守る「脇当て」の可能性が高いと考えています。この部分だけ鹿角製だったことを考えれば、実用品というより装飾的な意味合いが強かったのではないのでしょうか。

いずれにしても類例がほとんどないので、この鹿角製小札の用途については、さらなる研究が必要となります。



(参考) 大阪府長持山古墳出土鉄製小札甲の胸当て